

## 今日の説教のポイント <マタイによる福音書 26 章 36~46 節>

ゲッセマネでの主イエスの祈り。苦悩に満ちたその姿は何を意味するのか？

「そのとき、悲しみもだえ始められた。…わたしは死ぬばかりに悲しい。…祈って言われた。『父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、私の願いどおりではなく、御心のままに。』」(37~39)

この箇所を読んで誰もが思うことは、「イエスさまがなぜこれほど十字架にかかることを苦しまれたのか。十字架にかかるために来られ、自分でもそのことをわきまえておられたはずなのに」、ということでしょう。そこで、「なんだ、結局、我々と同じで、十字架の苦しみや死が怖かったのか」と考えるなら、それは考える方向を間違い出しています。聖書を読んで勝手に色んなことを考えることはできます。しかし、聖書がここから何を考えよと言っているかということから考えなくてはなりません。『ヘブライ人への手紙』の中で聖書はこう言っているのです。

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。」(ヘブライ人への手紙 5:7~8)

ここの「従順」で、私たちは何があっても神様に素直に従い続ける姿を考えます。それでいいのですが、その時に、何があっても動じず平然としていられる姿を思い浮かべるとしたら、それは違います。予期せぬことが起きる。慌てふためき、神様のことも忘れ、恐れて怯え、うずくまってしまう。しかし、その中からゆっくり時間をかけ、神様を信じることを思い出し、思いを立て直し、そして神さまを見上げて立ち上がり、歩み行く。それが「従順」の本当の内容なのです。

こう考えると、ゲッセマネのイエスさまの姿から大事なことが見えて来ます。イエスさまはスーパースターではない、すなわち、私たちと同じ存在であるし、またそれでいいということです。この箇所ほど聖書の中で、イエスさまは「真の人」(日本キリスト教会信仰告白)であるということを示している箇所はありません。「真の人」とは、私たちと同じ人間であり、しかも、神様が喜んで下さる本当にあるべき人間の姿を示している人を意味しています。イエスさまは私たちが恐れ慄くのと同様に、否、恐れるべきものを真に知っておられるが故に、私たち以上に恐れ慄かれるにもかかわらず、神様への「従順」(十字架への道)を歩み通して下さったのです。ですから、この時、悲しみもだえ、恐れられたのでいいのです。それにもかかわらず父なる神様に祈り続け、最後には、「私の願いどおりではなく、御心のままに」と言われて、「立て、行こう」(46)と歩み出されたことが大事なのです！

イエスさまが弟子たちに何度も、「目をさまして祈りなさい」と勧められることも大事です。私たち人間は「心は燃えていても、肉体が弱い」(41)からできないことを教えておられるのだ、と思うなら間違いです。私たちも、神に向かって祈ればできるようになる「従順」を、イエスさまは御自身の身をもって示して下さいました。イエスさまのご受難の深く、広い、恵み豊かな意味を味わいましょう！